

日本人の⑧ 日スキー

破たんを見せない
杉山進のスキー



バルトル・ノイマイヤー（左）と杉山進



写真・文 志賀仁郎

コルパッチスキー場を滑る

ヨロップ・アルプスをめぐる7週間の旅から帰って、まず最初の仕事がこの日本人のスキーである。ちょうど出来上ったばかりの7月号の次号予告に杉山進のスキーを採り上げるとあるからには、その責任を果さなければならぬのだが、実のところ、今回の旅行では杉山君の技術を克明に分析する時間がなかったというのが本音で、7月号予告にあるような「ヨロップで見聞したことが彼のスキーの上にとどのよう反映しているか」などという若干そそっかしい採り上げ方は出来ないのである。たかだか7週間ばかりの経験が彼の完成されたスキーを変えざるもなし、また、ヨロップで仕入れた新しい技法といった目新らしさをPRするようなやり方を極端にきらう彼を、そうした角度から眺めることは、僕にも出来かねる。

彼のスキーは美しい。完成された破たんのない流れるようなリズムのあるスキーだ。力で押し切るまき割りかナタのようなスキーとは対照的な静かで、そして切れ味のするどい名刀を思わせるスキーである。

彼がサンクトゥリストフから帰った次の年に二人で作った「杉山進のトップスキー」という本があるのだが、その中には僕は、彼のスキートを次のように評した。「杉山君のスキーには、きたえぬかれた完成品といったものを感じる。どんな斜面、そしてどんな雪にも、彼は美しい破たんのないフォームを見せてくれる。彼がシェフールを描くとき、ぼくらは、名演奏家によつて奏でられる音楽を聴くような楽しさを味わう」と。また、「彼の技術的な自信とそれに支えられた精神的な余裕が、彼のスキーを流麗な美しいものに、また不安を感じさせないものに仕上げている」とも書いた。

ところで、その当時の彼のスキーと今の彼のスキーを比較して、どこかに変化を見付けることはできるだろうか。残念ながら僕の目は、そうした新らしさ、変化というものを見付け出すことは出来ない。またカメラを使って彼の技術を克明に分析する作業を毎年続けているが、そのフィルムを比較しても、そこに変化は見られない。きたえ抜かれた完成品からは、何の修整すべき部品をも見付け得ないのである。志賀高原で撮影したフィルムには、何回撮影しても同じフォームが記録されている。驚くべき正確さといえるだろう。

さて、今回の日本人のスキーで採り上げる杉山君のスキーも、そうした意味から、数年前の「杉山進のトップスキー」また「杉山進のオーストリア・スキー」の二冊の本に、また多くのスキー雑誌に克明に紹介されて来た以上のものをお見



コルバッチの斜面の大滑降



せすることができない。

今回の日本人のスキーでは、完成された彼のスキーは日本の雪の上でもスケールの大きなヨーロッパの氷河の上でも、全く同じフォーム、同じ技法でシュプールをきざむのだといったことを見ていただけと思う。

僕の苦しい弁解は、この程度にして写真の説明をしましう。1頁目は日本にもおなじみのオーストリアの名手バルトル・ノイマイヤーとならんでキッツ・シュタイン・ホルンの斜面を見上げる杉山君。このキッツ・シュタイン・ホルンには新しく、アンテス・スポーツハイムが建設され、その校長さんがこのノイマイヤーである。このスポーツハイムは全く素晴らしい設備を持ち、オーストリアのスキーにかける国家的な熱意というものを感じさせられたのだが、その詳細はいつか杉山君の口から、またベンによって報告されるはず。その下の写真はスイスのサンモリッツ近くに新しく生まれたコルバッチスキー場を滑る杉山君と、下田、児玉のトリオ。バックの山は名峰ベルニナである。

この写真は、同じくコルバッチでの新雪の滑降。このコルバッチ (CORVATCH) は、サンモリッツの西隣りにあるシルバプラナの町から標高3451mのコルバッチ・ピークのすぐ下までケーブルカーが架設されて雄大な氷河の滑降が楽しめるようになったスキー場である。この写真を撮影した5月の初旬には粉雪の大滑降を存分に楽しむことができた。ヨーロッパでも人気急上昇中のスキー場である。



杉

山進君のスキーには破たんというものがない。条件の悪い斜面ほど彼のスキーは安定したものを感ぜさせてくれる。今回の旅行では、ヨーロッパアルプスの氷河に作られたスキー場のほとんどを滑りまわったのだが、それらのどの斜面もそれぞれ特徴的な雪質を持つていたように思う。ヨーロッパの高地のスキー場は、5月6月といっても新しい雪が降り素晴らしい粉雪のバーンになるが、一旦晴れ上がると急激に気温が上昇して、始末の悪いベタ雪に変化する。その変化の早さは、日本の立山や乗鞍あたりとは比較にならないくらい早いようだ。そうした雪質の変化にも彼のスキーは何のためらいも見せることがない。常に安定した技術で条件の悪い斜面を克服してしまう。

この頁には杉山君のホーム・ゲレンデである志賀高原丸池Aコースでのスキーを紹介したい。この急斜面はスキーヤーにとってひとつの努力目標になっている斜面だが、この凸凹の急斜面での彼の技術を正面からと横からとカメラは追って見た。この斜面では毎年こうした凸凹急斜面の技術を撮影するのだが、いつ撮っても彼のスキーは不変である。

上は、コブとコブとの間を軽快に飛ぶエアーターン、こうした斜面でのこの技術は、ちよつとしたタイミングのズレも転倒を呼ぶが斜面の大きなリズムをのみ込んでの飛行は美しい。カタバルトから射出されるような激しさといった要素はなく、腰の下にスキーをヒョイと引きつけて体の中心が描く軌道を変えないように見えるスキーだ。飛ぶといった意識よりも、空中に浮かぶといった感じのスキーである。左の連続写真は、正面から見た弧の小さな左まわりと、横から見たやや大きな弧の右まわりである。この二組の写真から彼の安定した腰と上体、そして柔軟に左右に振り出される脚部とを見ることができよう。いわゆるバインシユビール・テクニクの真ずいがここにある。上体は常にフォールラインに向いていること。そして下肢が左右に振り出されることによって作り出される。外向傾のフォームが美しい安定感を生み出している。



志賀高原丸池Aコースを滑る



キッツ・シュタイン・ホルンで



今や杉山君は日本のプロスキー界のリーダーである。彼の着実な歩みは、プロスキーヤーの指導標としての役割を果たしている。安定したスキー学校の運営と、秀れたスキー教師作りの実績は、彼の持つ夢の証といえるだろう。今、彼は新しく開拓されるスキー場に独立した校舎と宿舎を持つスキー学校を作る仕事に没頭している。その破天荒を見せない安定したスキーからも読みとれるように彼はまた人生のステップも一歩一歩着実に踏みしめて行くだろう。写真はキッツ・シュタイン・ホルンでノイマイヤーと滑る杉山学校の教師たち。このレンツ君は今シーズン杉山学校の教師としてク教授から推され来日する。彼の力強いスキーはスキーファンの注目を集めることだろう。

